

(続)改めて「地域の時代」を問う ——「温故知新」・「繋拾合」・「観照から行動へ」の勧め——

徳島経済研究所技術顧問 工学博士

西池 氏 裕

地域の課題を考えていく際に強く感じたことを随想風に並べました。現代社会の風潮や傾向を鑑みて留意すべき3点です。少し内容が多岐になりすぎるかもしれませんが、データに依拠する既述という観点からは、若干不満も生じましょう。とはいえ未来の地域を思い描く際には、かくあってほしいということは一貫させたつもりです。その3点を「勧め」の形で逐次述べていきます。

- 1) 「温故知新」の勧め
- 2) 「繋拾合」の勧め
- 3) 「観照から行動へ」の勧め

第1章「温故知新」の勧め

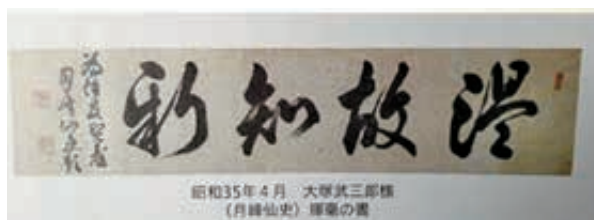
●多くの経営者が座右の銘とする言葉

「温故知新」という言葉があります。この言葉の由来は「論語」の中の2番目の章「為政」の中にある孔子の言葉です。漢文では「子曰、温故而知新、可以為師矣」と書かれ「子曰く、故きを温ねて新しきを知れば、以って師と為る可し」（しいわく、ふるきをたずねて あたらしきをすれば、もってしとなるべし）と読みます。意味は、「孔子先生はおっしゃいました。古くからの伝えを大切に新しい知識を得て行くことができれば、人を教える師となれるでしょう」となります。

「温故知新」を座右の銘にしておられる経済界の方は多いようです。私の周囲では1986年に

阿波銀行の頭取になられた故住友俊一氏です。氏が大阪支店勤務を終えて本部へ転勤するとき、大塚製菓の創業者である大塚武三郎さんからいただいた揮毫があります。(写真1)そこに書かれていたのが「温故知新」でした。その経緯は氏が亡くなられた際に追悼出版された本に書かれてあり、その表紙にもなっています。

写真1. 大塚武三郎氏の「温故知新」の揮毫



何故経済人には「温故知新」などの論語の中の言葉を銘としておられる方が多いのでしょうか。勿論『論語』そのものの魅力もあるわけですが、私は日本の近代化を推進した人々の精神的姿勢が感動を与えているためだと推測しています。和魂洋才という言葉が明治政府は基本的方向として唱えたわけですが、日本の近代化は日本という地域の精神的風土に西洋の資本主義をうまく融合させることに成功したことが後の世に良い結果を残せる大きな理由の一つだと思います。

●「論語と算盤」における「道徳と経済の両立」

近代が始まった時代というのは西洋においても中世から近世を通じて培ってきた精神風土に

近代合理主義が芽生え根付くまでの疾風怒涛の時代だったと思いますが、日本においては封建主義的精神風土にいきなり新しい思想が輸入されたことで、西洋とは異なる大変な時代だったと思います。

その中で日本ならではの種々の工夫がなされました。典型的な一つの例として渋沢栄一の考え方を挙げることができます。渋沢のことは2024年から使用される新一万円札の肖像(写真2)として、また『青天を衝け』という、2021年放映のNHK大河ドラマの主人公として描かれましたのでより多くの方に知られるようになりました。彼の業績を簡単に述べますと「日本資本主義の父」と称されるように日本の資本主義経済体制の創成期に活躍しました。藍を栽培する農民から身を起し、約500社もの企業を立ち上げ、500以上の社会事業にも携わり、日本の金融制度や経済システムの基礎を築いたといわれています。

写真 2. 2024 年度発行予定の一万円札見本



彼の思想や信念の根幹を記したとされるのが『論語と算盤』(*1)で、今なお数多くの経営者や起業家に読み継がれ絶大な影響力を保持しています。彼は、この著書で道徳と経済の両立について説いています。「道徳と経済の両立」ということをもう少し述べると、経済活動を行う上で利益追求だけでなく、道徳的な価値観も重視すること、と言えよいでしょうか。一般的に、経済活動は利益追求を主目的とするため、道徳的な価値観とは必ずしも一致しないと考えられがちです。しかし、長期的な視点から見れば、道

徳的な価値観を尊重することは、企業の信頼性やブランドイメージを高め、経済的な成功につながるとも言えます。また、社会全体が持続可能で公正な経済システムを維持するためには、道徳と経済の両立が必要となります。このような観点から、「道徳と経済の両立」は重要なテーマと言えます。企業でコンプライアンスが強く唱えられるようになったのは、そんなに古くないことから考えても、この両立という思想はそう簡単ではないように思えます。

渋沢のこの思想は、明治時代の日本が西洋の近代化と伝統的な価値観との間で揺れ動いていた時期に、大きな影響を与えました。彼は、西洋の資本主義を取り入れつつも、それが個人の欲望による利己的な行動を助長することを警戒しました。そのため、彼は「論語と算盤」の経済思想を提唱し、経済活動における道徳的な制約の必要性を説きました。

その中から具体的な考えを1、2紹介します。

【金銭を取り扱うことが、なぜ賤しいのだ。君のように金銭を賤しんでいては、国家は立ちゆかない】

江戸時代には士農工商の身分制の順位からわかるように金銭を扱う商人が一番卑しい身分とされていました。これは、当時の価値観では、商人は物を生産せず、他人が生産した物を売買するだけの存在と見なされていたからです。加えて、商人が利益を追求する行為は利己的であると見なされ、社会全体の利益を考える農民や職人と比べて評価が低かったと考えられています。しかし、現実の社会で、商人たちは経済活動を通じて社会に大きな影響を与え、特に都市部では商人の地位は次第に向上していきました。後に商業を基盤とする資本の蓄積を行い、産業革命を準備したといえます。

【利益を得ようとすることと、社会正義のための道徳にのっとるということは両者バランスよく並び立ってこそ、はじめて国家も健全に成長す

るようになる。個人もちょうどよいあんばいで富を築いていくのである]

渋沢のこの思想は、企業の社会的責任(CSR)という考え方の先駆けとも言えます。利益追求だけでなく、企業が社会に対して果たすべき役割や責任を認識することの重要性を、彼は早くから認識していました。

したがって、『論語と算盤』は、単なる経済理論を超え、我々が生きる社会全体に対する深い洞察の視座を提供しています。経済活動が個人の道徳や社会の福祉と密接に関連していることを示し、現代においてもその価値は色褪せていません。今日の経済社会における道徳的な指針と多くの経済人がしたのでしょう。また、この本は渋沢が人生から得た種々の教訓が述べられているために、自己啓発本としても高く評価されており、人間的に大きく成長し社会貢献したいと考える人々にとって有益な内容が含まれているのでしょう。

●渋沢栄一の見識

もう少し「論語」である理由を掘り下げてみます。「論語」は、孔子の言行録であり、その教えは個人の道徳を重んじ、社会の調和と秩序を求めるものです。思想としては儒教として体系化され現代に至るまで継承発展しました。一方、「算盤」は、商取引を象徴し、利益追求と経済発展を意味します。渋沢は、これら二つの要素を結びつけ、経済活動も道徳に基づくべきだと主張しました。

江戸時代の士農工商的身分制度の中心的思想である儒教の思想と、近代合理主義の基盤となった「算盤」の思想が融合することは、いっけん矛盾とも思える奇妙な感じがするかもしれませんが、しかし、「士農工商」という言葉は身分の上下を必ずしも表していないという指摘も近来ではなされますし、むしろ儒教ではなく武士道という日本独特の思想が金銭に携わることを卑しむという風潮を作ったのではないかとも思われます。「論語」と「算盤」が矛盾なく「共存」する

理由は、それぞれが人間の異なる側面を表しているからです。「論語」は道徳と倫理を、「算盤」は近代合理主義の経済活動と利益追求を象徴しています。これらは一見相反するようには見えませんが、実際には人間の行動と社会の機能において両方とも重要です。

渋沢の卓見『論語と算盤』の思想は、これら二つの要素が互いに補完し、バランスを取ることができると思えるところがあります。「共存」ではなく、「相互補完」や「調和」がより適切な表現かもしれません。道徳と経済活動は一緒に存在するだけでなく、互いに影響を与え、社会全体の福祉に寄与します。

この資本主義思想と儒教の関連性は、西洋における資本主義とピューリタニズムの関連性を思わせることがあります。経済学者マックス・ヴェーバーは著書『プロテスタントの倫理と資本主義の精神』によって広く認識されています。ヴェーバーは、プロテスタントの一派であるピューリタニズム(清教徒主義)の倫理観が、資本主義の発展を促進したと主張しました。

ピューリタニズムは、厳格な道徳観と勤勉な労働観を持つキリスト教の一派で、その信者たちは自己の成功を神の恩寵の証と見なしました。この観念は、個人の努力と成功を重視する資本主義的価値観と一致します。一方、資本主義は、個人の自由と競争を重視し、労働と投資による利益追求を基本とする経済体制です。これらの価値観は、ピューリタニズムの倫理観と共鳴し、資本主義の発展を後押ししたとされています。同じように儒教的倫理観を持って資本主義を推進しようとしたのは渋沢の際立った先見性のある卓見だったと思います。

この視点から見れば、『論語と算盤』の思想は、個人の利益追求と社会的な責任感を結びつけることで、資本主義をより持続可能で公正なものにするための道筋を予見しています。それは、経済的な成功と道徳的な価値が共存するだけでなく、互いに強化し合う可能性を示唆しており、現代社会における経済と倫理の関係を理解する

ための重要な視点を提供します。

●温故知新を何故現代でも勧めるのか

論語の中でも「温故知新」の教えは、現代社会においても非常に重要な役割を果たします。特に、資本主義が変質し、都市と地域の格差が広がり、生活が変質しようとしている状況において、この教えはさらに重要性を増していると感じております。

まず、「温故知新」は、経済の持続可能性と公正性を保つための重要な指針となります。過去の成功や失敗から学び、それを基に新たな戦略やビジョンを形成することは、企業が競争力を保ち、同時に社会的責任を果たすために不可欠です。また、過去の教訓を忘れずに新しいビジネスモデルや技術を探求することで、企業は社会と環境に対する影響を最小限に抑えつつ、経済的な成功を追求することができます。いわば「温故知新」は不易の教訓だということです。簡単に言えば、「まずは」もっと本を読めということです。「まずは」と言ったのには意味があります。本を読む人が減少したことと同時に、後述しますが、読んで観照し行動せよという意味を含ませたからです。

次に、本論の最大関心事である、地域の問題に関して、その必要性を指摘したいと思います。都市と地域の格差が広がる現代において、「温故知新」は、社会的公正と包摂性を促進するための道筋を示します。過去の社会政策や経済政策の成功と失敗から学び、それを基に新たな政策を立案することで、社会全体の福祉を向上させ、格差を縮小することが可能となります。特に今までの行政の地域政策に関しては様々な研究がなされていますが、もう一度自分の地域に関してその地域の住民が自ら検討しなおす必要があるでしょう。世の中は「地方の時代」と喧伝されており、そのための方策が次々と打たれていますが、相変わらず地域は疲弊の方向に向かい、格差は広がるばかりです。やはり過去の経験を学ぶことがまずなすべきことでしょう。

最後に、生活が変質しようとしている現代において、「温故知新」は、個々の人々が自身の生活をより良くするためのガイドラインを提供します。過去の地域における生活そのものや地域政策の経験から学び、それを基に新たなスキルを習得したり、新たな生活スタイルを探求したりすることで、個々の人々は自身の生活を向上させ、変化に対応することができます。

●地域の時代における、歩くことの勧め・読書の勧め・ネットの勧め

WEBの普及で人間の知識の取得手段は現代では大きく変化しました。もともと「温故知新」には書籍を通じて古い知識を得るような雰囲気がありますが、実際のモノコトに触れて得る知識は重要です。それと同時に書籍から得られる情報は情報を体系だって理解し考察するには必須です。また、インターネットを使った情報収集は知的生産活動に携わる者にとっては恐ろしいほど効率的で、優秀な助手を何人も雇ったと思ってよいでしょう。

現代を地域の時代と規定すれば、その時代における「温故知新」は具体的にはどのようなところから手を付けるべきでしょうか。例えば後述のような課題はどうでしょうか。私自身が周囲にいつも勧めていることです。

すでに「徳島経済」で幾度か提唱していることですが、地域の時代について、書籍やWEB上で学び、できれば足を運んでいきたいテーマ名だけを述べます。

- * ご近所歩きマップ作成(観照の訓練になる)
- * 地域の歴史(街角歴史博物館見学など、地域史)
- * 地域の産業(藍産業、たばこ産業、林業、塩田業、生糸産業の歴史、近代産業史)
- * 時代の認識(各種の近代産業史、戦後史等)
- * ネット知識と「本」の違い(ITの歴史;WEB検索、ChatGPTの使用習熟)

第2章「繋拾合」の勧め

地域の課題を考える際に留意すべき2点目は人間の絆の問題です。現状で地域が抱える最も厳しい現実とは過疎化の問題とそれにも関係のある「人間の絆」の希薄化です。「人間の絆」は住みよい社会の根幹をなすものです。第2章では「人間の絆」の問題で近ごろ感じる社会の風潮のことを述べてみます。

●恋文横丁

昔、といっても戦後のことですが、恋文横丁という場所がありました。(写真3)安手の飲み屋街で、しかもいかにも通俗的といえそうな名前ですが戦後復興期の東京の雰囲気をよく表していると思います。少し詳しく話したいので付き合ってください。

「恋文横丁」は、かつて東京都渋谷区にありました。渋谷駅から歩いて行けるところです。この横丁は、元々「道玄坂百貨街」という商店街の奥に存在した小さな横丁で、その名前は丹波文雄の小説「恋文」に由来しています。記憶に間違いなければ「すずらん横丁」という名前だったと先輩から聞いたことがあります。1945年の東京大空襲で一面焼け野原になった東京には、戦後すぐに多くのヤミ市が自然発生的に生まれました。その中でも道玄坂百貨街は、渋谷でも最大のヤミ市だったと言われています。徳島市にもありましたが、多くの空襲を受けた都市では戦後急速にヤミ市が出来上がりました。

名前の由来には、先輩から聞いたところによると、なかなか興味深い話があります。朝鮮戦争時、渋谷のすぐ近所の代々木公園にあった「ワシントンハイツ」には多くのアメリカ兵が駐屯していました。日本に配属された駐留軍のアメリカ兵士と恋に落ちた女性が、言葉が通じない中で思いを伝えるために生まれたのが、この横丁のラブライター代書屋だったといえます。なにか心が痛む思いがします。ひょっとしたら、あの先輩も時折はアルバイトをしていたのかもしれない。

写真3. 恋文横丁此処にありきの碑



れません。私の通った高校は語学が得意とされ、その中でもきわだって英語が上手だったし、そんな雰囲気を持った先輩でした。

そういう横丁をテーマにした丹波文雄さんの新聞小説「恋文」が大ヒットし、1953年には映画化され大きな話題を呼んだそうです。それで「恋文横丁」という名前になったようです。現在、この場所は若い人を中心に、ロマンチックな場所として恋愛のパワースポットと言われているそうです。碑の近くのポストから手紙を出したり、メールを送ったりすると恋が叶うとか。(以前述べたことがあります。新しい伝説の創出に徳島は余り長けていないと見え、名所になるべき文化的遺産がたくさん埋もれているような気がします。)

今や世界に名だたる大都会と言える渋谷なので代書屋はけっこう昔からありましたが、戦後にはこんなにも複雑でかつ切ない思いを代筆する店が存在してたのです。そういえば現在進行中の大河ドラマでも主人公の若き日の「紫式部」が市で恋文用の和歌の代作を内職にしていたっけ。

この小さな横丁の歴史は、渋谷の街の一角にひっそりと佇む「恋文横丁此処にありき」と言う

碑に刻まれています。この碑は東京都行政書士会によって設置されました。なるほどと思います。

余談になりますが、その「恋文代筆屋」の隣（と記憶していますが）には「大黄河」という餃子を食べさせる飲み屋がありました。先日ある俳句協会のHPに載っている写真を眺めていたら、恋文横丁の色褪せた写真があって、なんと「大黄河」の看板が映っているではありませんか。ということで大黄河にまつわることを話したくなりました。始めてこの店に入学祝いだといって私を連れて行ってくれたのはEさんです。同じ高校の一級上のEさんは山岳部の先輩でした。彼は私と同じ大学の文系に入学しており（私は理系です）、中国文化研究会という部活を行っていました。今から考えたら、あの店へ私を部活に勧誘するために連れて行ってくれたのかもしれませんが。Eさんは知っていたかどうか分かりませんが、私は高校時代から「論語」を読んだり、唐詩を鑑賞するのが好きでした。孔子にどことなく風貌の似ている漢文の坂本先生という方がいました。先生を中心とする数人の「論語」素読会に私は所属していたせいもあり、中国文化には大いに魅かれるところがありました。というわけで、一も二もなく入部を決定。翌日クラス仲間と希望の部活は何処かという話をしていた時、ある旧友から「お前なあ、中国文化研究会というのは麻雀部のことだぞ」、といわれてびっくり。だが実態は麻雀どころか部活の時は大量のガリ版刷りのパンフレットを渡され輪読、むずかしい言葉の渦の中にいきなり放り込まれました。でもそういう時間は長くは続きませんでした。中国文化研究会ではじきにまとまった部活動が行われなくなり、私たち新入部員は放置され、私自身もだんだん他の事に興味移っていき自然退部の形になりました。今から思うと大躍進政策の失敗からどう立ち上がるか、あるいは中ソの路線対立で中国は混乱を極めつつあり、その思想的混乱、混沌状態が日本の中国好きの学生にも及んでいたのではないで

しょうか。案の定1966年には文化大革命が口火を切ったのです。

餃子店「大黄河」で思い出したもう一つの余談にもつきあってください。

私の在学した高校は元旧制の府立六中、新制の都立新宿高校といい、私は15期生です。昔の高校生は今より早熟だったのか、生徒にモノ凄い奴が多く、それを導いていた教師も猛者ぞろいでした。当時の校長はバンカラ校長として知られた沢登哲一先生、いつもよれよれの国民服に軍隊用の幅広バンドでズックの靴、ゲートルを巻いてズタ袋風カバンで登校していました。そのころの悪友の話では沢登校長は、なんでも「チャタレー裁判」で伊藤整の弁護人を務めたという噂でした。どれどれと図書館に行き文庫版の本を手にとってみたら、多くの生徒が読んだのでしょう、一部のページだけがうす黒くよれよれになっていたのを覚えています。他にも山岳部顧問で創部以来初めて入部したメツチェンだけのパーティーを照れながら率いて鍛錬登山に行った国語のF先生はじめ、バンカラ風が多く、校長自ら我々を「野郎ども行くぞ」と叫んでいたし、今思えばよくあんな環境で毎日無事に暮らせたなと思います。自衛隊の戦車が学校の横を通るらしいから、お前ら道路に座り込めとおおっていた若いT先生やら、ビートルズが来るからと授業そっちのけで飛びだしていった英語のX先生、それに、校庭裏にずらりと並ぶ連れ込み宿から通学しているという噂のあったY先輩、社会科のNという先生はついこの間まで軍国主義を礼賛していたくせに、平気で民主主義を教えていやがるから俺は奴の授業に出ないんだ、といきまいていたI先輩は、その後どうなっただろう。思い出せばきりがありません。でも、あれこそ教育の現場という気が今ではしています。

飲み屋「大黄河」の店の連想は今でも書棚にある古い本『黄河の水』（*2）に繋がります。高校では世界史は勉強したというより頭の中に四次元的世界として構築して楽しんでいた感があり

ます。何世紀ごろという頭の中に世界地図があらわれて地域ごとにいろいろな出来事や人物があらわれて、活動している、そういう動画の俯瞰図のような世界です。これは当時受けた授業の方法にも影響を受けたのだと思います。Tという教師の授業は黒板に各国史を年表として細かい字でぎっしり書き出し、生徒はひたすらにそれを写すだけ。その結果Tの授業を受けた私の視力は自慢の2.0から1.0以下に下がってしまいました。でもその授業は面白く、授業につられて、山川出版の世界史全巻といくつかの各国史をむさぼるように読みました。そのおかげでしょうか、それまで子供の時から読んでいた歴史物語がみんなそれぞれの関連が出てきて、勝手に脳の空間で活躍を始めたようです。その各国史として歴史の教師が強く勧めてくれたのが『黄河の水』でした。

『黄河の水』は、中国の歴史を神話時代から中華人民共和国成立までの四千年にわたり一気に通観できる薄手の一冊です。著者の鳥山喜一は、中国の歴史だけでなく、各時代の文化や思想もまとめています。この本は、中国史だけでなく各国史を私のような目的で読んでみようとする人にはお誂え向きの入門書だと思います。内容は60年以上前の著作ということもあり、古代史における近年の考古学的発見が反映されていない点、現代史が欠落している点などという弱点はあります。しかし、中国史の概略を知るには十分な内容が含まれているとしても良いでしょう。歴史は年代を暗記するので嫌いという人が時折いますが、年号を覚えるのではなく大パノラマを楽しむものだと思えばまた世界の見方が変わると思います。孫にもちと古いかないと思いましたが、高校生になったのでこの本を薦めてみました、読んだらどうか？

(閑話休題)

●年賀状仕舞い

このごろ古い友人たちの中の数人が「年賀状仕舞いをします」と言ってきました。当人とし

ては、終活の断捨離のつもりでしょう。本人は「あいつも年だし負担も減っていいだろう」くらいのもつもりかもしれません。だが、正直「ブルータス、お前もか」と裏切られたような気分になります。いつも顔を合わせている人なら、年賀状が来なくてもそう気にはならないのですが、一年に一回しか音信の無い人からいただく年賀状は特にうれしい。一文字、一言の裏にあるものまでいろいろ想像して読んだりします。手紙や葉書というものはそういうものだと思います。だから、毎年何百枚も印刷で出す年賀状ですが、幾日かをかけて必ず一言を肉筆で添え書きをして出すことにしています。

何人かは年賀葉書をEメールにしました。ずいぶんと詳しい一年間の報告を書いてくる人もいます。それはそれでよく消息がわかって楽しいのですが、やはりなんだか物足りない気がします。肉筆の文字には何らかの力があるのではと思います。もう半世紀をはるかに超えて毎年年賀状をくれていた人が今年初めて来なかった時には、ぽっかり穴が開いたような気がします。手紙や葉書のような郵便には単位情報を伝えるだけでなく、人間の思いを伝える役目のようなものがあるのでしょうか。

さっきの恋文横丁から、いろいろと連想が進んだのですが、この頃の若者は恋文を書くのでしょうか、気になります。手っ取り早く電話やSNSのやりとりがメインの思いの伝達手段かもしれません。しかしよくいわれるように、手紙には独特のコミュニケーションの「趣」があります。文章によるコミュニケーションというのは、かなり微妙なものです。言葉自体があたかも独自の能力を有しているのではないかと思えるほどです。特に肉筆ときたら文字自体がその人の個性を表しているような気さえします。年賀状だけでなく手紙や葉書もこのごろは減っているという統計があります。

郵便制度というのは種々の形で古代から存在していましたが、近代に入り均一料金制度が出来上がって、爆発的に普及しました。1840年に

イギリスでローランド・ヒルの考案による均一料金郵便制度が施行され、近代郵便の基礎が確立されました。切手収集家のあこがれである世界最初の郵便切手「ペニー・ブラック」(写真4)が作られましたので「ペニー郵便制度」とも呼ばれます。

写真4. 世界最初の郵便切手



日本では1871年3月1日に東京、京都、大阪の3都市とその間を結ぶ東海道筋の宿駅(62カ所の郵便取扱所)で新式郵便業務が開始されました。それには、前島密と渋沢栄一の協力が大きく寄与しています。前島は、政府が飛脚問屋に支払う通信用の金額より、はるかに安い飛脚便制度を提案し、渋沢が政府に建議書を提出しました。日本の最初の切手は龍紋切手(写真5)と呼ばれますが、貨幣単位が文というところが面白いですね。また48文という半端な数字にもいわれがありますが、自分で確かめてください。新貨幣制になって円・銭が導入されたのは1871年の旧暦の5月だそうですので、その意味でも記念すべき切手ですね。

写真5. 日本の最初の切手



また、日本の郵便制度の特徴として、「自由、平等、公平」の実現を目指し、誰もが平等に使える制度として築かれたことは特筆すべきです。ここにも渋沢の思想の具現化がみえるのではないのでしょうか。後で少し詳しく述べますが、この制度は全国津々浦々に行き渡り、社会生活に浸透し、災害時や過疎地域でも住民を支える強固なシステムとして今に至るまでその精神は生き続けてきました。でもこのごろ少し郵

便制度は時代にあうように急速に変質しつつあるように思われます。日本社会における人間の絆希薄化に一役買っているような気がして腹が立っているのは私だけでしょうか。

●年賀状取り扱いの推移

数人の知人が「年賀状仕舞い」をしたので、現在実際にどのくらいの人が、そうしたのか、また、その原因となったのがIT機器の普及が原因となったのか、非常に気になりました。郵便の退歩によって人と人との絆が失われてゆく気がしたからです。そこで配達数の推移を調べてみました。

私と同じように気になる人が、WEB上でデータを公開していたのでそれを引用させていただきます。(図表1)図に示すように年賀葉書の発行枚数のピークは2003年です。最近2024年には発行枚数14.4億枚と激減しているようです。

図表1. 年賀状発行枚数推移



資料：旧日本郵政公社統計データベース、日本郵政グループディスコロージャー誌

一般的に、郵便物、またその運用システムとしての郵便配達制度は私たちの生活に多大な影響を与えており、その役割は次のように整理されます。(※3)

- ① 情報の伝達：郵便制度は、手紙や小包の送受信を可能にし、人々が遠隔地にいる

他の人々とコミュニケーションを取る手段を提供。

- ② 金融サービス：郵便局は、貯金、送金、保険などの金融サービスを提供し、人々の資産形成や送金ニーズを支える。
- ③ 地域社会への貢献：郵便局は地域社会の一部として、地方自治体事務の取扱いや見守りサービスなど、地域に根差した取り組み。
- ④ 生活インフラの提供：郵便局は、国民生活を下支えする基盤となる生活インフラを提供します。これには、信頼できる身近な窓口、情報や人のネットワーク、基礎的な通信や自助支援サービスなど。
- ⑤ 過疎地域へのサービス：過疎地域でも郵便局は存在し、そこでの新聞の配達や金融サービスなど、地域住民の生活を支える重要な役割。

これらの役割を通じて、郵便配達制度は人々の生活に深く浸透し、情報の伝達、金融サービスの提供、地域社会への貢献など、多方面で人々の生活を支えています。また、これらのサービスは、人々が社会とつながり、生活を豊かにするための重要な手段となっています。

特に①に書かれたコミュニケーション手段という考えの中に分類されてしまうと、少し違うぞと思われる役割があります。それを別に分けると、

- ⑥ 感情の伝達手段：年賀状や恋文はその典型ですが、感情を伝えるのに独特の趣のある手段。

ということができるとは思いませんか。

加えて、③～⑤の項目は郵便システムが地域の生活、とりわけ地域社会の絆を作っていく上での有形無形のインフラとなっていることを示しています。

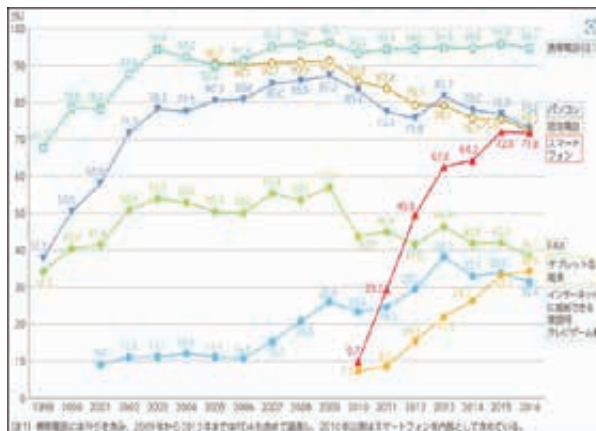
● IT機器の普及と郵便制度

どうも伝達機能が重なるから、年賀状の衰退とスマホの普及は関係がありそうな気がしま

す。

図表2はスマホ他IT機器の普及率を示しています。

図表2. スマホ他IT機器の普及率



資料：総務省情報通信機器の世帯保有率の推移

年賀葉書発行数がピークになったのは携帯電話が飽和した時と一致していますので、そこから推察できることは、やはり電話が便利だから年賀状を送るのをやめてしまったのだろうか、ということです。だとすれば、感情(挨拶)伝達手段としての年賀はがきは減少したが、携帯電話等に代替していたと見るのが妥当かもしれません。

しかし問題がいくつもあります。

ひとつは感情の伝達という観点からは趣が重要です。文字には独特の力があります。だんだんそれが薄れていくような気がします。

もう一つ言語機能の効果が、かなりIT機器によるそれと異なっており、現段階では異なることによるマイナス効果が顕著に顕れています。最も大きなマイナス効果はSNSにおけるヘイトスピーチの氾濫が典型的に示しているのではないのでしょうか。その原因としてSNSの匿名性がよく指摘されます。確かにそれもあるかと思いますが、私はSNSの文字の使用法には「間」がないからだと思っています。「間」というのは空間ですが、考える時間をも意味しています。考える余裕を持つ、行間の考えを読む、自分を客観視する、それらは皆、「間」を必要と

します。現在のSNSによるコミュニケーションは、それを取りにくくなっているのではないのでしょうか。

さらに人間の絆を考えるうえではIT機器は、人間の絆を考えるうえでの機能、特に前記③～⑤に示したような役割を考えるうえで、従来の郵便および配達制度とは質の異なるもので代替にはなりません。これも地域の絆を重視する立場からは重要問題です。

実は私は単にIT機器の発達だけが年賀状の減少の原因ではないと思っています。つまりただでさえ希薄になりがちな人間同士の絆、それを断っていくことが世の中の風潮として流れているのではないかということです。

●断捨離やら終活やら年賀仕舞いやら

ここで「断捨離」について考えましょう。断捨離は人間の絆を破壊するための行為だと私は考えています。もちろん人間の絆を断つことによって、きれいにこの世とお別れしようという人々にとっては、余計なお世話かもしれませんが。

「断捨離」は、ヨーガの思想を提唱した沖正弘が1976年の著書『ヨーガの考え方と修業法 上巻』で初めて使用した言葉といわれています。ヨーガの行法である「断行」「捨行」「離行」に対応して、「断」は新たに手に入りそうな不要なものを断る、「捨」は家にずっとある不要な物を捨てる、「離」は物への執着から離れる、という意味があります。

この思想を広めたのは作家のやましたひでこさんだと思います。「断捨離」を商標登録までしてしまいました。つまり「断捨離®」です。彼女の提唱によると「断捨離」は不要な物を「断ち」「捨て」、物への執着から「離れる」ことにより、「もったいない」という固定観念に凝り固まってしまった心を開放し、身軽で快適な生活と人生を手に入れようとする思想ということになります。断捨離を実践することで、時間にゆとりができ、家事や掃除が楽になり、お金が貯まり、

決断力がつき、自己肯定感が増すなどの効果が期待できるということで、多くの人々がこの思想を実践しているといわれます。

でも私は冒頭に述べましたようにこの思想には賛成していません。むしろ、どんどん無駄と無用を捨ててしまう合理主義より、モノの存在価値を大事に考えるケニア人女性、ワンガリ・マータイさん(彼女はノーベル平和賞を受賞しました)のような「もったいない派」です。百鬼夜行絵巻に出てくるような、使用可能なのに捨てられたモノのお化けが出てくることを怖れる類の人間です。

すでに「断捨離」はいろいろなデメリットも指摘され始めていると思います。例えば、同居する家族の所有物を勝手に捨てたり売却してしまいトラブルになるとか、パンデミックや災害時の時に経験したように備蓄を持たない生活のデメリットが表面化したように思います。

私が「断捨離」という生活の方法論をあまり感心しないのは、その目的とするところからではありません。上述したような、「身軽で快適な生活と人生」が持続的に達成できるなら結構な話です。私が感心しない理由は断捨離という思想が、ややもすれば人間と社会の絆さえ切捨てることすら良しとする危険性があるからです。このことは特に、ただでさえ過疎化の進行によって孤立化が進む地域社会においては非常に危険な思想だと思います。

●終活は老人の行う断捨離である

もう一つ、人間の絆を破壊することを推進しかねない「終活」についても考えてみましょう。

終活は、「就活」のもじりで、「終末活動」の略です。人生の終末を迎えるにあたり、延命治療や介護、葬儀、相続などについての希望をまとめ、準備を整えることを指します。この概念は、2009年に「週刊朝日」で連載された「現代終活事情」により広く知られるようになったようです。その目的とするところは自分自身の残りの人生を充実させ、後悔がないように準備をすること、

そして残される家族など周囲の人たちの負担を軽減することです。

現実にやる作業について、どのようになるか、WEB上に似たような終活アドバイスサイトがいくつもあります。どういうわけか十項目に分類したものが多のですが、大同小異のサイトが多くあまり著作権を主張する内容でもないので勝手にまとめてみます。

- (1) 荷物の整理：断捨離をする。
- (2) 医療や介護の意思表示：万が一医療や介護が必要になったときのために意思表示をしておく。
- (3) 財産の管理・整理：財産の整理をし、不動産の名義や境界線などの問題があれば解決しておく。
- (4) 葬式の希望をまとめる：葬儀の形式や呼んでほしい人を決めておく。
- (5) お墓を決める：お墓に関する詳細を決めておく。
- (6) 相続についての取り決め：相続対策や遺言書の作成を行う。
- (7) 老後の資金・住まい計画：老後のための資金確保や支出の見直し、将来の住まいについて検討する。
- (8) 交友関係の整理：何かあったときに家族から連絡して欲しい人などの連絡先をまとめる。
- (9) 老後にやりたいことを書き出す：趣味や旅行など好きなこと、やりたいことを考えて書き出す。
- (10) エンディングノートの作成：家族や友人、自分のためにエンディングノートを作成する。(※4)

ここで注目したいことは、終活というのは最初の「週刊朝日」の目的【人生の終末を迎えるにあたり、延命治療や介護、葬儀、相続などについての希望をまとめ、準備を整えること】にとどまらず、実生活上に大きく波及していることでしょう。(1)にある断捨離や(8)にある交友関係の整理は交友関係を狭め社会とのかかわりを

断っていく方向に進んでいくことが考えられます。それゆえ人間の絆を破壊する危険があるのです。

終活カウンセラー協会では独自に、「終活」を「人生の終焉を考えることを通じて、自分を見つめ、今をより良く自分らしく生きる活動」と定義しているのですが、それから逸脱する危険性が非常に大きい。なぜ「終活」を、単に「エンディングノート作成活動」ととらえるのではなく、このような熟考目的に拡大して定義するのでしょうか。

私は終活における断捨離を想像すると、木食行(もくじきぎょう)のことを連想してしまい、得も言われぬ空虚感におそわれます。少し木食行のことを述べてみます。

●究極の終活 木食行

五穀を断ち十穀を断つ木食行というのがあります。Wikipediaの【穀断ち】【木喰戒】等々を参考にして説明すると次のようになります。【穀断ちは、仏教や修験道の行のひとつ。穀物を食べずに修行すること。別称を木食戒、断穀行。具体的には五穀または十穀を食べないことをさします。五穀・十穀の名をとって五穀断ち、十穀断ちともいいます。穀物を人間の穢れにまみれた俗世の物と考え、それを食さないことで修行者の身を清廉にする行。修行者は修験者に多く、苦行形式です。穀物以外の木の実や草根を主として食べたといいますが、五穀・十穀とされる穀物に諸説あるなどの理由から、やり方はさまざまです。禁止する穀物によって修行の困難さにも差があります。また即身仏になるための修行・入定において、その最初の段階で行われる修行方法でもあります。】ということですが、即身仏になるために死んだあと処理しやすいように体から脂肪分を抜くための行でもあるらしい。最後に漆を飲むなどと聞いたことがありますが、凄いですね。

私の友人に仏像好きがいて、酔うとすぐに「五穀を断ち十穀を断ち、やがて我は生き仏」とのた

もう奴がいました。実際にはまだ生きていますが、漆を飲むといって私を驚かせた男です。別の知人ですが、いつもお神酒徳利みたいにつるんでいる友人が重い病気になったとき、「女断ち」をして回復を祈願したとって周囲を笑わせてくれます。このようにモノを断つことは庶民の精神風土に生きているのかもしれませんが。「塩断ち」、「酒断ち」など物を断つということには、レベルはいろいろあっても、何か強い願望と意志をもって、いわゆる願掛けを行う、一種の行でしょう。「断捨離」という行為に同調するのは、ひょっとしたら日本人の精神風土の何かに触れて興味を惹くのかもしれません。実は私も若いころ、ラマ僧が麦こがしを羊乳に練ったものだけで心身を浄めるということを何かで読んであこがれて、それで暮らしてみました。なんと一週間も持たず精神的にもふらふらになりやめてしまいました。モノを断つなどの行は凡人のやるものではなさそうです。

●高齢者は姥捨て山も木食行も拒否すべき

突然ですが映画『デンデラ』というのを観たことがあります、いささか強烈な印象を受けたのでこれも紹介します。古くて細部は覚えていないので、ここで少し「ずる」（変な言葉ですね。徳島ではいわゆるアンチョコのことを「ずるー」というそうです。少し引っ張って発音するところが面白いですね）をします。今をときめくAI君に書いて貰いました。それが以下の【】内の文です。

【映画『デンデラ』は、70歳になった女性たちが村の掟により山に捨てられ、そこで「デンデラ」という共同体を形成し、生き延びるために猛獣（筆者注：OSO 18みたいな熊ですかね）や自然の脅威に立ち向かうという物語です。彼女たちは、自分たちを捨てた村への復讐を企て、その過程で人間の生と死、愛と憎しみ、絆と裏切りといったテーマが深く掘り下げられます。

この映画は、姥捨てという古代からの風習を通じて、現代社会の高齢者問題や家族のあり方、コミュニティの重要性などを問いかけてい

写真 6. 映画『デンデラ』ポスター



ます。姥捨ては、生存競争が厳しい時代背景から生まれた風習で、高齢者が若者の生存を阻害するという考え方が根底にあります。しかし、映画『デンデラ』では、捨てられた老婆たちが共同体を形成し、互いに助け合って生き延びる姿を描き、高齢者が社会にとって重要な存在であることを示しています。また、彼女たちが村への復讐を企てることで、高齢者が社会から疎外され、無視されることの問題点を浮き彫りにしています。このように、映画『デンデラ』は、姥捨てという風習を通じて、高齢者の存在価値や社会のあり方を考えさせる作品と言えるでしょう。】

良くまとまっているので特にコメントをつける必要はないと思いますが、高齢者の問題は、近代合理主義が生産性だけを重視することへのアンチテーゼとなると思います。さらには、この映画は、人間の絆の問題を現代世相に反映して考えたりするきっかけにはなります。

●「繋拾合」の勧め

この章のタイトルに使った「繋拾合」というのは実は「断捨離」の各文字のそれぞれの反意を並べて作った造語の遊びです。反「断捨離」にしても良かったのですが、アンチなんかかというのでは意味が限定されて発展性がないような気がします。要は「人間の絆をもっと」ということで

すから「繋拾合」の勧めにしました。「けいしゅうごう」と読みます。

第2章で言いたかったことを、充分述べられなかったことも含めてまとめてみました。

- 地域社会の生命線は「人間の絆」です。地域の時代を推進するためのインフラとでもいうべきIT技術によるコミュニケーションは従来の「人間の絆」を破壊もしくは変質させています。
- 断捨離の思想は使い捨て思想と紙一重であり、最も危険なのは「人間の絆」を自ら放棄する方向に働くことです。
- 人間はリアルにモノに接することで認識を深めます。特に新鮮な認識はリアルにモノに接することにより生まれます。
- 特に高年齢層はいわゆる「情報難民」となり孤立化する危険性が高いですが、若い人々にとってもほんとうに断捨離は時間の余裕を作るための方法となるのでしょうか。実は変形した終活にすぎないのではないのでしょうか。

「間」という時間的・空間的「遊び」は人間の精神生活にとって重要なものですが、「間」が有効なのは、そこに人間の観照するという行為が加わるからです。それがなければ単なる「間抜け」になってしまいます。

第3章「観照から行動へ」の勧め

前回の「徳島経済」でも述べてきたことですが、今後の社会が変化する方向はネットワーク的パラダイムを持った社会であり、したがって、地域の時代と呼ばれるように地域ごとの特色を生かした社会システムの構築を目指すべきでしょう。それを考慮しつつ現在と今後の地域の問題を解決するためには、従来以上に地域の人材による活性化と、それを可能にする住民の草の根からの活動が重要なカギとなるでしょう。では具体的にはどのようなシステムと機能が必要となっていくのでしょうか。それは今後時間を

かけて追及していくべき課題と思いますが、現段階的ではいくつかの仕組みを早急に創り出していくことが必要だと思います。

●住民による地域を観照することの重要性、および「観照から行動」へ

現代社会は人間の絆を弱めており、特に地域では過疎化の進行ともあいまって孤立化する人たちが増大しています。この課題はすでに大きな社会問題として多くの研究や施策がなされていることはすでに周知のことですが、現実問題として政治の世界でも有効な手段はなく、少子化や過疎化の進行は止まっておりませんし、しかも技術進歩は人間の心を豊かにするはずが、逆に人間の絆が薄くなることを助長していることが多いようです。

現在地域の問題にうまく対処できないのは住民自らの、いわゆる草の根からの運動が不足していることも、ひとつの大きな原因だと思います。加えてもっとラジカルなことは、地域の時代を土台で支えるべき技術革命、社会のインフラの構築がまだ進行中だということです。そういう時代には青写真を描き、それを通して自らが地域を作り出していくのだという人材を育成することが肝要です。つまり来るべき時代の準備をすること、今それに取りかかる時期だと思います。

この章では、観照することと行動することについて述べてみます。どうやら地域の時代を作り上げる社会的原動力の重要な一つであるIT技術の発達、モノコトをじっくり見て、観照することを人々に忘れさせている傾向を感じるから一大事です。じっくり観て(観察して)対象の本質を見抜くことを観照といいます。その力を育成しなければと思います。

もともと、観照という言葉が仏教や哲学に起因しているためでしょうか、とかく抽象的になりがちです。観照というのは見ることで知識を増やし喜ぶだけにとどまるのでは意義が半減します。行動が必要、つまりモノに働きかけるこ

とが大切です。もともと人間は実際のモノコトに働きかけることで認識を深めます。同じことが人間や社会関係にもいえます。人間の絆を強くすることで人々は自分の周囲をよりよく識ることができ、またより良くしようと動き出すモノだと思えます。

●地域で最もファンダメンタルないくつかの課題とそれを解決するための意識革命

若干前回の「徳島経済」の繰り返しになるかも知れませんが、地域が抱えるファンダメンタルな課題を述べ、次に現状で地域の未来を考える上での意識革命のことを述べてみます。

本来「意識革命」というのは独自で行うべきものではなく(焚書坑儒や文化革命みたいになってしまいます)、社会の状況に応じて自然に進行すべきものですが、第3章は行動を勧める内容になっていますので、今後の地域の在り方を考える上で、精神的な方向性として今、重要であると思われる何点かを指摘したいと思えます。

① 人口問題と世代間格差の問題

「地域の時代」と呼ばれるようになってからも大都市への人口流出は歯止めができていません。その理由は種々論じられていますが、有効な手段が講じられていないためです。というより、真の「地域の時代」が訪れるためにはIT技術発達による情報技術だけでなく、物流や人間移動の技術がさらに革命的に発展する必要があると考えています。

今の多くの人口問題への対処の方向性は、知らず知らずに大都市と同じような環境を目指しているのではないのでしょうか。現在の人口構成とその近未来的動態を前提として、その中での理想的な地域の特色を活かした絵図面(プラン)を作り直すべきではないのでしょうか。現代はZ世代が登場していますので、世代間格差を考慮した絵図面になる必要があることを忘れてはなりません。

② 中央礼賛からの脱却

これは繰り返しになりますが、やはり大都会特に東京は人々があこがれるだけの魅力を有しています。しかしこれも物流システム・交通システムが格段に発展したら、たとえば観劇でもなんでも苦もなくできるようになるはずですが。昔は考えられなかったですが、今では徳島から神戸に気楽に買い物に行ったり、京都に歌舞伎を見に行ったりするではありませんか。徳島に住むようになったとき驚いたのは、文筆家の中にも「地方版」とか「全国版」とかいう言葉があって、自分たちのことを一段低く考えてみせる方が少なからずいることです。すでに情報発信の地域格差は原理的に消失する環境がIT技術でできていますし、物理的な差異は少なくなるはずですが。むしろ地域の生活の方が精神的には豊かになる時期が近づいていますし、それを前提として考えていくべきです。

③ 郷土愛の育成と文化行政の在り方

やはり、地域を自らの手で良くしていくと気持ちが湧いてくるのは、人間には郷土愛があるからでしょう。郷土愛を育むために必要なのは義務教育期間中の郷土史と郷土地誌です。さらに郷土の文化的遺産の発掘と創生です。すでに既報でも述べたようにこの領域での地域文化行政の果たす役割は非常に大きいと思えます。ただ注意しなければいけないのは、文化行政や教育行政が、だんだん行政主導になり、さらには国の主導となっていていくことです。

●最初の結節点としての「50年後にありたい徳島の姿」

私達はどうしたらいいのか、何から着手したらいいのか、ということを書いてみます。

そのことは、すでに県単位の行政で戦後を通

して仕事は営々と続けられています。

しかし前提を地域ごとのスマートカントリーを目指すというところに置くと、現在の地域再改造計画にはまだまだ不足なところがみえてくるはずです。「徳島県改造計画」のような絵図面を画くとすれば、今いちど徹底的に夢物語としての地域特有産業と文化を中心とした計画を作っては如何でしょうか。つまり現在の人口数と動態を基本に、現状の枠にとらわれない例えば50年後の未来図を画く計画を大学、産業特に金融、住民を中心にして策定するのです。

「現実的」な中期計画は県政が変わる度に登場します。だが予想未来図を基にした計画はありません。行政はまず実現可能性と公平性を基本とするからこの主の計画には適していないのかもしれないかもしれません。民間主導で考え行政が支援するというスキームにする発想の転換も必要です。それによって何処を目指すべきかという共通認識ができるはずです。

●草の根民主主義の原則と今必要な事

上記の改造計画は、現状の枠にとらわれずに50年先(あるいは時代の変化速度から行って30年くらいが適当かもしれない)の理想を画くと同時に、草の根からのアイデアを取り入れていこうとするのが特色となります。ここで「草の根民主主義」とはなにかについて寄り道します。

草の根民主主義とは、一般市民一人一人が積極的に政治に参加すること、またはそのような政治形態を指します。以下に具体的な特徴を述べます。

1. **市民の積極的な参加**:草の根民主主義は、市民が自覚的に政治に参加し、その意見を反映させることを重視します。これは、市民活動や住民運動などの形で具現化されます。
2. **地域自治の原則**:草の根民主主義は、地域自治を原則とします。これは、中央集権的な官僚的意思決定に対する反論として位置づけられます。

3. **大組織や富裕層との対比**:草の根民主主義は、既存の特定の政策に傾倒した大組織や富裕層によるものと対概念をなします。

4. **日常的な参加**:草の根民主主義は、底辺の民衆の日常的な政治参加によって支えられる民主主義のあり方を指します。

以上の特徴から、草の根民主主義は、地域政治において市民の声を直接反映し、地域の利益を最優先に考える政治スタイルを表しています。

●技術進歩によって可能になることの自由な予想、あるいは地域の時代の前提条件

そうそう、絵図面の前提条件として社会的ファンダメンタルの急速な発展を入れることを忘れてはなりません。それがなければ真の地域の時代は到来しないのですから。

「大都市圏における居住に関する世論調査」というのが内閣府で実施されていますが、2021年の世論調査結果を参照しながら大都市圏へ人間が移転する理由をまとめると次のようになります。

- 交通の利便性
- 物や店が豊富
- 芸術や文化に触れる機会が多い
- 情報に触れる機会が多い
- 生活環境が整っている

調査の項目を参照しながら、全てを生活環境としてまとめ直してみると次のように考えられます。

- ① **物質的な環境**:これには住居、衣料品、家庭用品、食料など、日常生活を営むために必要な物質的な要素が含まれます。上記の「物や店が豊富」と同じと思ってもらえば良いようです。
- ② **自然環境**:大気、水、土地などの自然的な状況も生活環境の一部です。これは、例えば公園や緑地の存在、空気や水質の状態などを指します。これは地域の方が

勝っているのではないのでしょうか。

- ③ 社会的環境：これは、教育機関、医療施設、公共交通機関などの社会インフラ、また地域社会の人々との関係性などを含みます。現在都市と地域での格差が多いところ です。
- ④ 精神的な環境：これは、個々の価値観、生活スタイル、趣味、嗜好などが形成する、心地よく生活を送るための環境を指します。
- ⑤ 情報的環境：インフラ的に考えるとIT技術の発達はこの面ではほぼ完全に大都市圏と地域の格差をなくしましたが、現実では地域に高年齢層の情報難民を大量に顕わにしました。大都市圏の場合は埋もれて見えなくなっています。

これらの項目に分けて考えると、技術(特にアクセス、交通手段、物流手段の発達)によって環境が変化したら解消する課題が多いようです。すでにWEB上での買い物と緻密な配達システムは日常化していますし、その場所にでかけなければならないような買い物、観劇や美術展のようなイベントもアクセスがよくなれば容易に行うことができるようになるでしょう。現在切実な医療もAIの発達で誰でもが地域の病院で第一線の治療を受けられるようになるはずで す。教育に関してはもっとラジカルな教育システムを創造しても良いと思います。地域の教育システムはもっと県の自主性と草の根民主主義的教育がなされるべきだと思います。高等教育機関は地域を支える人材を育成するために、全寮制を主流としても良いのではと思いますが、現実には自然の流れで決まっていくでしょう。

地域のスマートカントリーを創生していくには、前回の「徳島経済」でも簡単に述べましたように、県の中にいくつかのハブ的小都市(スマートシティ)を中心に人間居留地の再配置を考える必要が生じると思っています。各地域毎に特徴在る性格を有したネットワーク構造をもった

社会の再配列が進行するようになったとき、初めて真の地域の時代といえます。

こうなってくると精神的環境としては自然に恵まれた環境の方が有利になり、まさに地域の時代が到来します。それを前提として未来の絵図面を描くべきです。

●「むなしさ」より「じたばたする」べき時代

夢語りのような未来社会を語る事が現在最も大事かと思っています。それによって社会全体がこの場合地域全体の人々が同じ方向を向き、同じ生き甲斐を感じることができないのでしょうか。しかしながら足下のことを言えば、現代ほど都市と地域の格差が開いたことはないし、また世代間の考え方・感じ方のギャップが大きくなったことはないのではないのでしょうか。少なくとも第二次大戦から現在に至るまで生きてきた実感でそうです。どの時代でも世代間のギャップは指摘されていましたが、このごろのような「高齢者世代」から「Z世代」まで、世代による価値観の相違があり、かつ多様性の名の下に価値観の「ぼやけ」が蔓延している時代はなかったように思われます。

現代は、新しい時代が始まる前の虚しさが蔓延している時代だと思っています。そういえばこのごろ「虚しさ」を扱った著作がちらほら店頭にあられるようになりました。

少し古いところでは、西部邁の著書『虚無の構造』(*5)は、現代人の精神の奥底に巣くうニヒリズムを深く掘り下げています。特に現代の虚無という位置づけでインターネットを取り巻く社会の「雰囲気」を説明しています。2024年にはフォーカルセダーズのメンバーで精神科医のきたやまおさむが『『むなしさ』の味わい方』(*6)という本を著しています。ノウハウ的な本を含むと相当な数の本が出版されています。また少し「面白い」ところでは、「アルコール」飲料のストロングゼロを飲みながら退廃的な空気や自虐を吐き出すようなツイートをするのが「ストロングゼロ小説」と呼ばれWEB上で流行りま

した。「不安で仕方がないから、誰かと繋がってほしい」という現代人が抱える潜在的願望が表現されていたといえましょう。

このような傾向は、新しいモノを生み出すエネルギーを何も生み出さなくなる怖れがあります。そのことを怖れなければならないのが、焦眉の課題かもしれません。実は、きたやまの本を読んでいたら感じたのですが、その課題の解は意外と簡単です。虚しさを破るには、虚しさを明るく味わえばいいのです。とにかくじたばた行動しつづけることだと思います。

終章 おわりに

前章(第3章)はなんだか[地域の時代の考え方]のまとめた書き方をしてしまったので、「おわりに」などはもう書かなくても良いようなものですが、じたばたするついでに地域の時代の到来を妨げる可能性の「在る傾向」について少し述べたいと思います。それは「虚しさ」の隙間から心に侵入してくるポピュリズムが静かに或いは熱狂的に影響を拡大し続けていることです。この傾向はまちがいがなく「地域の時代」などを木っ端微塵にふきとばすほどのエネルギーを持ったファナティックな面をもっています。本報告はポピュリズムについて述べるのが課題ではないので、単にポピュリズムは地域の時代の到来を妨げるという不安だけを述べるのにとどめますが、問題提起をさせていただきます。ポピュリズムとここで述べた地域の時代、草の根民主主義の考え方がハリーポッターとヴォルデモート卿のような関連性を持ちかねないからです。ポピュリズムに関して詳しくはいくつかの

簡単な解説書や評論(*7)が出ていますからそれを読んでいただくとして、両者の関連を探ってみましょう。

1. **地域の声の反映**：「地域の時代」では、地域の声やニーズが直接政策に反映されることが求められます。ポピュリズムもまた、大衆の声を政策に反映することを重視します。この点で、「地域の時代」とポピュリズムは共通の特性を持つと言えます。
2. **エリート批判**：ポピュリズムはエリートや既得権益層を批判する傾向があります。「地域の時代」でも、地域の利益を守るために、中央政府や大企業などの「エリート」に対する批判を行うことがあります。
3. **地域主義とポピュリズム**：「地域の時代」は地域主義の強化を意味します。地域主義は、地域の利益や特性を重視する思想で、これはポピュリズムの「大衆」の立場を重視する思想と一部重なります。

実はポピュリズムと地域格差との関連は社会的にもこれからの検討課題だと思いますが、米国などで広がる移民排除、民主主義の軽視、白人伝統社会への回帰等の傾向は私の眼には永年築いてきた平和と民主主義の社会の破壊としか映りません。ポピュリズムが勢いを得たら、たぶんここで考えるような地域の時代の青写真など吹っ飛んでしまうのではないのでしょうか。

日本ではまだ本当の意味でポピュリズムと呼ばれる政党は登場していないように思われていますが、今後の推移は注意深く見守る必要はあると思います。

<参考文献>

- * 1 浅沢栄一『論語と算盤』
2008年、角川ソフィア文庫
- * 2 鳥山喜一『黄河の水』
1960年、角川文庫
- * 3 「少子高齢化、人口減少社会等における郵便局の役割と利用者目線に立った郵便局の利便性向上策」情報通信審議会答申概要 2018年、総務省
- * 4 佐藤啓太「終活とは？「終活でやること10選」フランスベッドメディカル
- * 5 西部邁『虚無の構造』
2013年、中公文庫
- * 6 きたやまおさむ『「むなしさ」の味わい方』2024年、岩波新書
- * 7 ポピュリズムには次のような解説書があります。

- ・水島治郎『ポピュリズムとは何か—民主主義の敵か、改革の希望か』
2016年、中公新書
- ・カス・ミュデ、カルトワッセル、クリストバル・ロビラ『ポピュリズム—デモクラシーの友と敵』永井大輔・高山裕二訳
2018年、白水社
- ・ヤン＝ヴェルナー・ミュラー『ポピュリズムとは何か』板橋拓己訳
2017年、岩波書店

特に日本のポピュリズムに関する文献としては、以下のものがあります。

- ・堀江孝司『「人気取り」の政治：日本の国会における「ポピュリズム」の用法と批判の論理』
2022年、人文学報
- ・大嶽秀夫『日本型ポピュリズム—政治への期待と幻滅』2003年、中公新書

これらの文献は、ポピュリズムの理論的な枠組みを提供し、その現象を理解するための洞察を提供しています。

<西池氏裕氏略歴>

- 1944年生
- 1974年4月 川崎製鉄入社技術研究所
- 2000年～2004年 東京大学先端科学技術センター客員研究員
- 2006年4月 財団法人徳島経済研究所技術顧問（現）
- 2007年8月 徳島県経済成長戦略アドバイザー（兼）
- 2008年～ ひまわり俳句会主宰（現会長）
- 2011年9月 徳島県教育委員長（～2012年8月）

